

河崎家旧蔵月刊幼年絵雑誌と子どもの四季

豊田 千明 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

古河歴史博物館の収蔵資料のひとつに旧河崎家所蔵の資料約1,000点が所蔵されている。

さて、河崎家とは、かつて茨城県旧古河町を貫く、日光街道沿いの二丁目に存在していた肥料商であった。

『八州通商録』(明治30年12月)¹という業界誌の「茨城県古河町之部」(323頁)を見ると、「肥料酒類油塩商 古河通二丁目 利 河崎登志」(写真1)という記述を見ることができ、河崎という屋号の存在を明らかにしている。この河崎登志は、実は、鳥海新右衛門という人物の三女で、商売上の看板として「河崎」を名乗っていた²という。また同じ『八州通商録』「茨城県古河町之部」(322頁)に確認できる、写真2「荒物類紙烟草卸商 下野屋 今城定吉 古河町」の記述に見える、今城定吉の次男に利一という人がいて、彼はのちに、登志の入夫となった。すなわち、鳥海登志、今城利一が縁を結んだことによって家としての河崎家が創設された、ということになる。明治36年(1903)1月のことであった。

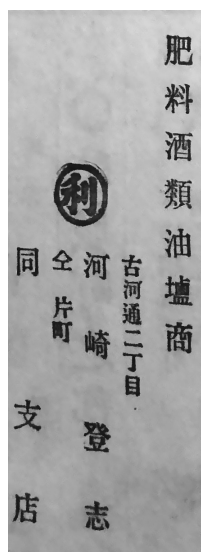


写真1

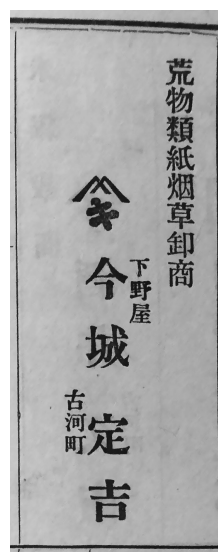


写真2

『地方経済』³によると、利一は、明治14年(1881)10月生まれ。幼名は利助。肥料商を営む登志と縁を結び、その後、利一は実業家として成長していく。よき肥料商として、また農家のよき相談相手、よき指導者としての努力を怠らず、肥料を仕入れ、販売し、農家から厚い信頼を得て、めきめきと成長したという。

やがて、河崎利一の名は、昭和11～16年(1936～1941)の『地方経済』⁴の茨城県内の長者番付にも登場するようになる。たとえば、昭和11年における正味身代50万円～70万円で東の方「関脇」、昭

和13年1月には正味身代150万円で西の方「横綱」、昭和15年1月には正味身代200万円で西の方「横綱」、昭和16年1月にも身代200万円で西の方「横綱」というようにである。

河崎家資料

こうした河崎家に伝えられてきた資料群の特徴は、同家の文化の多様性を表現するさまざまな資料によって構成されているとあってよいだろう。とりわけ、注目されることは、同時代の生活や風俗を詳らかにすることのできる民俗資料が多く伝えられていることである。また、子どもたちへの初等教育に関わる実用に供された品々は、質、量ともに貴重な資料群といっても過言ではない。所蔵品にはさまざまなものが含まれているが、その一端を紹介するならば、婚礼、新生児誕生、食べ合わせメモなどの記録、絵はがき、学校バザーの写真、卒業アルバム、美術展の案内状、招待券、芝居パンフレットが挙げられよう。

この他に、子どもに関する資料として、羽子板、紙人形、すごろく、ゲーム、折り紙、リリアン、おもちゃ絵といった遊具、玩具に属するもの、図書などがある。図書は、単行書、雑誌、教科書、参考書、副読本など約300余があり、このうちの大半が子ども向けの雑誌、絵雑誌である。漢字、ひらがな、カタカナを習得した子どものための、読み物中心の『少年倶楽部』などの児童雑誌に加えて、文字を獲得する前の子どもが、絵をみたり、絵の背景に印刷された、平易な文字であるひらがなやカタカナを身近な親や兄弟、保育者に読んでもらいながら享受する、幼年絵雑誌⁵も多く残されている。

また、これらの雑誌には、実際にこれを手に取って、見たり、読んだりしていたと思われる子どもの名前が保育者の手で記されていることから、実際の保育や教育で使用されていた媒体そのものであるということがわかる。これは河崎家所蔵資料の特徴を考察する上で、今後、大切な要素になると考える。

月刊幼年絵雑誌

この河崎家資料については、すでに、その一部が、所蔵先の古河歴史博物館や、渋谷区郷土博物館・文学館⁶での展示で紹介されているが、いまだ、その全容やコレクションとしての特徴については報告されていない。そこで、このたび閲覧できた約300点余については、今後、詳細な調査、報告をしたいと考えている。ひとまず、旧河崎家所蔵の月刊幼年絵雑誌によって、子どもにもたらされたものについて考えていきたい。

さて、月刊誌は、出版の性質から、毎月発刊され、一年を12ヶ月に分けて見ることができる。現在刊行される大人向けの月刊誌においても、同様であり、さまざまな形で各月に趣向を凝らして編集される。中でも、最も重要な趣向は、月毎の「季節」というテーマに合わせて、内容を創造し、提供することにある。子ども向けの月刊誌においては、大人が保育者目線で、読者である子どもたちに与えようとする毎月の内容が届けられる。そこには、おのずから日本の時の移り変わりである、四季に彩られた、子どもの生活、遊び、行事などが描かれる。また、学校という場を描く時は、新たな季節に春夏秋冬というイメージが重ねられ、スポーツや運動会、遠足、学校始めといった学校行事に関わる要素も加わるようになる。

幼年絵雑誌は、文字を通してではなく、色彩や絵によって、描かれているものを想像し、楽しむ媒体である。保育がいまだ仕事として家庭から分業されていない段階では、絵雑誌を開く子どもの傍ら

に、保育者が存在し、今日で使われることばにいう、「読み聞かせ」ているといった光景も想像される。保育者の声を聞きながら隣で文字を追い、これによって、子どもがひらがなやカタカナを読むことができるようになることも容易に想像できる。家庭内で保育者と過ごす、あたたかで、甘美な時間の中で、毎月、工夫された絵雑誌を見る子どもは、絵で表現される情景やお話の世界に浸って、色彩やことば、豊かな表現を自分のものにし、身につけていく。これのみならず、幼年絵雑誌という子どもの文化財の世界は、子どもたちに、ことば、表現を身につける原動力、成長する力を大いに提供せしめたといってよいものである。

月刊幼年絵雑誌の四季

ここで、河崎家の大正から昭和初期の幼年絵雑誌に見出すことのできる、当時の子どもの四季、一年をたどり、取り上げていくことにしよう。

ものがあらたまる、新しくなることを好む日本人や日本文化にとって新年、正月は大切な時間であった。写真3は、『日本の子供』大正12年1月号に掲載された新年の往来の様子である。この頁は、雑誌の真ん中にあたり、折り込みで通常の見開き頁の二倍の大きさになっている。この頁に正月の風景を宛てるどころからも、編集者の正月に対する特別な気持ちや、子どもに正月を楽しんでほしいという期待も込められていると考えられる。また、同号の表紙に、付録⁷として「チャプリンお手柄双六」と記されているが、この双六は子どもの正月休みの特別な遊びを提供するために編集者が意図したものである。

写真3 [正月の往来の様子⁸]

『日本の子供』9巻1号(大正12年1月)東京 キンノツノ社



写真3

画面右手前には、新年を寿ぐ三番叟、三河万歳、その奥にオープンカーにのる二人の少女と運転手、その先には、正月の子どもの遊びで使う「凧」を持った少年。その後ろに門松、祭日に掲揚される国旗が見える。画面中央には紅白の提灯、この絵の掲載誌名が書かれた幟がついた初荷の馬車が描かれる。「ヤア ハツニノ ウマハ キレイダナ」と書かれている。画面左半分には羽織や晴れ着、髪飾

りを付けた子どもたちが描かれている。買ってもらった凧を得意げに持つ男児。お正月の芸能のひとつ獅子舞の、獅子頭を被り、太鼓を懸けた二人連れの子ともいる。「テケテン テケテン テンテケ テン」と太鼓の音も楽しげに書かれている。往来のすべてが清らかで、楽しそうに描かれている。

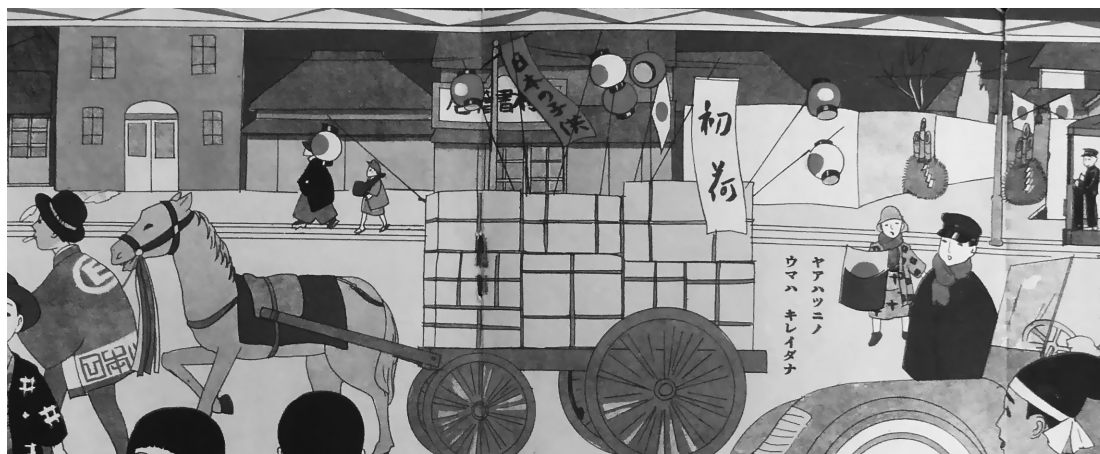


写真3 中央奥（部分）拡大

日本語には「盆暮、正月が一緒に来たみたい」という形容がある。今の子どもたちには共感を得られないかもしれないが、とっておきの贅沢で楽しい至福の時という意味で使われる。また正月の到来を待ち望む「もういくつ寝るとお正月」という歌詞もあるように、子どもたちが楽しみに待つにふさわしい様子が描かれている。街全体があらたまり、清らかで、心はずむ様子は、子どもに新年が特別な時間であること、よき一年が始まったことのめでたさを伝えている。

写真4 わかみづ⁹

『幼年園』9巻1号（大正13年1月 東京 培風館）

雪の元朝、井戸で若水を汲もうとする子どもを描く。神聖な力を持つとされる若水を汲む仕事は一年の最初の行事として大切にされた。注連飾りのつけられた清浄な井戸から、一家の主人や年男が汲む若水は、歳神様へのお供え、お雑煮や福茶を作る際に使用する。凍てつく元旦の早朝、子どもが大人にかわって若水を汲む、つまり、元旦の朝早くから、家の手伝いをする子どもを描く。読者の子どもが自分と同じ年頃の子どもが手伝いをする絵と自分とを重ね合わせることで、子どもへの教育的効果も期待できる。

また、この図には、大きな椿模様の羽織に縦縞の着物を着た少女の左に、少年少女の会話が「カホルサン オメデタウ」「オメデタウ ハルコサンハ ズイブン ハヤイネ」と記され、少年よりも少女の方が先に来て若水を汲んだことがわかる。輪飾りの付いた桶を持つ少女の左手が、ほんのり赤く描かれ、寒い中での手伝いであることの臨場感を与えている。



写真4

写真5 ふくはうち

『小学少女』2巻2号(大正9年2月 研究社)

二十四節気の立春、立夏、立秋、立冬の前日を節分といい、この日が季節の分かれる日となる。中でも立春の前日は冬から春に移る日であることから、一年の終わりと始めの境と考えられた。この日は、鬼が嫌うという鰯の目に柀を刺したものを門口に立て、邪を払う。節分は子どもが主体的に参加できる年中行事のひとつである。この『小学少女』の絵は、豆の入った升を持つエプロン姿の少女が、「鬼は外」と唱えて鬼に豆をぶつけ、鬼を退散させる様子が影絵で描かれている。また、「福は内」と唱えると大黒様が登場する。

同書には、節分の「おぼけ」¹⁰も描かれる。「おぼけ」は同書によると「お年越の日に、上方の娘さんたちが、大人のまげにゆふ、面白い風俗でございます。」と説明される。同書の図には、幼い少女が大人の島田や丸髷に結って出かける様子が描かれるが、老女が年若の桃割れに結うこともある。異形の者になって邪を払うという習慣である。この日だけに許されるお姉さんごっこ、お母さんごっことして女兒が楽しみにしていたといってもよいのかもしれない。



写真5

写真6 桃ノオ節句

『幼年世界』8巻3号(大正7年 博文館)

桜とは違った美しさの花、桃の咲く季節に行われる雛祭りは、五節句のひとつで、女子にとって伝統的で楽しいお祭りのひとつであった。振袖、被布などの晴れ着を着て、髪飾りのリボンをつけた少女が、雛段の飾りつけをしているところを描く。三人の中で最も年少に見える手前の少女は、紙で顔面を覆われた男雛の入った箱から何かを取り出そうとしている。食器を載せる懸盤、雪洞、緋毛氈の段の上には菱餅、隨身、橘などが見える。女子にとって雛祭りの人形や人形の諸道具、飾りは教材といえるもので、どの段に何を飾るのかを知ることが大切にされた。子ども自身が主体的に自分たちのお祭りのセッティングをしているところを描いている。



写真6

写真7 オヒナサマノイロイロ

『幼年世界』8巻3号(大正7年 博文館)

前掲写真6に続いて同書には、日本各地の雛人形も図入りで紹介する。家庭に普及したいわゆる古今雛のお雛様のほかに、読者である子どもに、日本には多様な雛人形があることを図で掲載し、啓蒙している。読者の日本文化、日本における女子の文化の知識を豊富にすることができる。



写真7

写真8 [花見]

『子供界』6巻4号(大正14年4月 宏文社)

東京の花見の名所、上野の山でねずみが花見をしている。左上の赤い色紙様の中に「ネズミノクニ ムカシノオモカゲ 上野清水堂 ハナノニギハヒ」とある。ここではファンタジックに人間をねずみに模している。閲覧した幼年絵雑誌には桜に限らず、牡丹、藤、蓮、朝顔、菊¹¹というように花を見ることを絵で紹介している。花の咲く国土の美しさや、咲く花の種類によって、読者は季節の訪れを知り、その中で時の経過や自分自身の成長を知るといってもよいと思われる。

また、右下に「ハナノクモ カネハウヘノカ アサクサカ」の松尾芭蕉の句が記されるが、これに関連して、上野山の名所が描かれている。すなわち、中央手前に、江戸時代、子どもの頃から天才俳人の誉れの高かった秋色女ゆかりの井戸を置き、「井戸端の桜あぶなし酒の酔」に詠まれた桜、酔ってはしゃぐねずみをユーモラスに描く。茶屋の団子屋で寛ぐねずみ、目隠しのゲームに興じるねずみ、緋毛氈の上には弁当が置かれている。春、桜の美しさ、桜の名所、行楽としての花見の楽しさを知ることができる。



写真8

写真9 [五月の節句]

『セウガク一年生』1巻2号(大正14年5月 小学館)

右下に「三月ノ オセツクハ ジヨシノ オマツリデス。五月ノ オセツクハ ダンシノ オセツクデス。」とあり、三月、五月で男女の節句があることを伝えている。右奥の床の間には、鍾馗様の掛物、その左に武者人形と武具を陳列する。左手前に邪を払う力があるとされる赤で染められた金太郎と鯉のぼりの置物がある。女子の祭りとは異なる勇ましい男子の祭りの情景にふさわしく、鉢巻きをした少年二人が手に菖蒲刀を持ち、武士のまねをしている。男子の遊びの勢いをあらわすように、この前で虎の張り子が転がるさまも描く。

また、子どもが楽しみにする粽やお強飯について、「ムカシノ イクサニ デルトキノ オベンタフニ シタ ト イフノデ、コノヒニハ オカアサマガ チマキヤ オコワメシヲ ゴチソウシテ クダサイマス。」と書く。端午の節句の食のいわれについて、子どもの知識として少年のことばで説明している。



写真9

写真10 サミダレ

『美しい幼女』7巻6号（昭和2年6月 ポケット講談社）

不快な梅雨の季節を、隅田川にかかる両国橋をバックに見開き頁で美しく描いている。学校帰りの子ども、雨ゴートに、爪革のかかった下駄、蛇の目傘をさした母親に手を引かれるエプロン姿の子ども。母親と同じ、爪革のかかった下駄を履く子どもが多い中、レインブーツ、フード付のレインコート姿の子どももいる。隅田川にかかる両国橋が雨にかすむ景色も描かれている。



写真10

写真11 タナバタマツリ

『コドモ』12巻7号（大正14年7月 東京 コドモ社）

見開き頁に子どもの七夕祭りの様子を抒情的に描く。七夕は古くは乞巧奠といった。裁縫、書道などの技芸の上達を願う行事であるため、和歌を書いた五色の短冊や色紙を笹につけて、その笹を軒に立てる。本書では笹と短冊、色紙を結ぶのに赤い糸を使用している。



写真11

写真12 カハピラキ

『日本の子供』10巻8号（大正13年8月 キンノツノ社）

川開き初日の両国の花火を描く。花火は鎮魂の意味合いもあることから、お盆の祭りや結びつくこともある。大人も子どもも楽しめる花火の日は子どもでも夜の外出ができた。

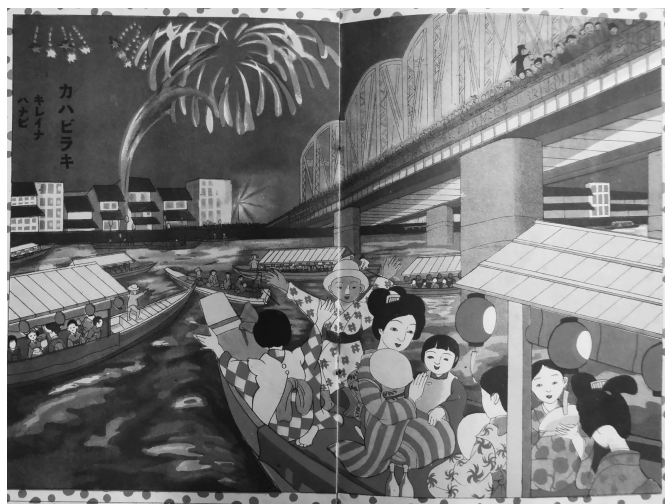


写真12

写真13 土用干¹²

『幼女の友』15巻9号（昭和6年9月 幼女の友社）

土用は、陰暦の立春、立夏、立秋、立冬の前の18日間である。土用干は、立秋前の土用の晴天の日に、衣服、書籍を風にさらして黴や虫を払う。この絵は桐箆筒や衣装箱から着物を出して、室内で干しているところである。色とりどりの着物で室内に花が咲いたようであるが、たすきがけをし、白い前垂れをした女性の持つ二重の着物について、少女が「ワタシ ハヤク フユ ガ キテ クレルト イイワ」と述べている。着る物を見て、季節を定め、その着物を着るのを楽しみに待つ様子をことばで表現している。ここで少女が衣装箱から着物を出そうと手伝いをしている様子が見られるが、少女に

とって、土用干は自分の家にある衣装を一覧できる楽しい手伝いだったのではないかと考えられる。



写真13

写真14 「秋の」ナナクサ

『尋常小学一年女生』 1巻1号(創刊号)(大正14年10月 集英社)
 「アキ ノ ナナクサ ウツクシク 咲キ乱レテイマス。スズシイ 虫ノ コエガ シマス」とある。春、秋の七草にはどのような草があるのかをことばにして言えることは、知識、教養のひとつであった。加えて秋は、虫の声のきれいな季節として捉えることを教えている。



写真14

写真15 稲かり 写真16 菊見

『幼年少女』 4巻11号(昭和2年11月 博英社)
 田んぼの稲刈りの様子を描いている。大人に交じって子どもが手伝いをしている。一面黄金色に色づく田んぼから稲を収穫する様子は秋の風物詩のひとつである。



写真15



写真16

写真17 年市 写真18 すすはき

『幼年園』7巻12号（大正11年12月 東京 培風館）

年市は年の瀬、12月末に立つ市である。賑わうこの市で、新年に必要な品物を買う。画面右下に、箒を肩に担いだ男が、注連縄、バケツに入れた裏白らしきものを持つのが見える。正月のお飾りである。中央から左には、よそいきの服装の子ども連れの夫婦がいて、男親とおぼしき人が羽子板を右手に取り、品定めをする。男親の右手には少女の手が伸び、男親に羽子板をせがむ様子が描かれている。この背後には凧を両手で持つ子どもがいる。子どもにとっての年市は正月の遊びの準備、用意の場でもあることを描いている。



写真17



写真18

一方、同書には、煤掃きをする子どもも描く。煤掃きでは、家屋についた一年の煤を払い、掃除をして、正月を迎える準備をする。白いエプロンをかけた二人の子どもが奥で、煤払いをしている。手前で家具のようなものを運ぶ二人の子どもの視線の先に、ねずみ、バケツをひっくり返しながらねずみを追う猫を描く。煤掃きの道具、叩きや箒、バケツも描かれている。遊びを楽しみにする子どもの様子だけではなく、一年の終わりに、家で楽しそうに手伝いをする子どもを描く。

おわりに

以上、河崎家旧蔵の月刊幼年絵雑誌の中から選んだ頁を紹介しながら、子どもの一年をたどってきた。タイトルはさまざまであるが、幼年絵雑誌作りに、四季や一年が重要視されていることが理解される。美しい国土は季節の変化をもたらし、生活に彩りを添える。また、子どもに情緒の安定と発達をもたらし、生活者として、一年という時間にリズムを生むことになる。

また、楽しい遊びを享受する子どもを描くだけではなく、大人の手伝いをする子どもも多く描いていた。ことばの上でも、子どもの台詞として語らせるなど、子どもが意欲的、主体的に家の手伝いにかかわり、協力するようになることをねらいにしたものといえよう。

河崎家の雑誌を実際に活用した、所有者の子どもについては、今後、調査を重ね、図書以外の子どもに関係する資料と合わせて、さらに深く考察する必要があると考える。これによって、大正から昭和にかけての、町場における商家の子弟の豊かな教育がどのようなものであったのかの一例を示すことができるかと考えるからである。

河崎家資料は、利根川や渡良瀬川の水運や日光道中を行き交う多くの人々が集うことで形成された文化や富が、子どもの教育や保育、そして成長をどのように支え、豊かなものにしていくことができたのかを考察するよき証言者といえよう。今後も多角的な視座による分析を続けて、その全容を明らかにできればと考えるものである。

本稿をなすにあたり、資料閲覧ならびに掲載許可をいただいた古河歴史博物館に深甚の謝意を表する次第である。

注

- 1 河崎家資料。
- 2 河崎家資料『地方経済』7巻10号（昭和7年10月号）44頁。
- 3 注2に同じ。
- 4 11巻1号（昭和11年1月）、13巻1号（昭和13年1月）、15巻1号（昭和15年1月）、16巻1号（昭和16年1月）。いずれも河崎家資料。
- 5 幼年絵雑誌の研究については、中村悦子氏にまとめた論考（『幼年絵雑誌の世界』高文堂出版 平成元年（1989））がある。
- 6 特別展「えがかれた子どもたち 町のこども・村のこども」、会期平成21年1月20日～3月22日、および同展図録。
- 7 『国立国会図書館国際子ども図書館展示会「童画の世界—絵雑誌とその画家たち」』（国立国会図書館国際子ども図書館 平成20年）10頁によると、現在の「紙おもちゃ」付録は、明治末から大正時代の幼年絵雑誌で、江戸時代の「おもちゃ絵」を応用した誌面づくりがなされたことからの影響という。また、昭和13年（1938）10月の「児童読物改善ニ関する指示要綱」の「禁止スベキ事項」の中で正月号以外の付録が禁止された、とあるが、正月号は禁止の範囲外であったことは興味深い。
- 8 写真キャプションは各頁の見出し語によるが、これを欠く場合などは絵の概要を示す語を〔 〕に入れて補った。
- 9 注6 図録51頁に掲載。
- 10 注6 図録50頁に掲載。
- 11 写真16参照。
- 12 注9に同じ。

参考文献

- 1) 中村悦子著『幼年絵雑誌の世界』高文堂出版 平成元年
- 2) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第1～3巻 大日本図書 平成6年
- 3) 国立国会図書館国際子ども図書館編『国立国会図書館国際子ども図書館展示会「童画の世界—絵雑誌とその画家たち」』平成20年
- 4) 渋谷区郷土博物館・文学館編『特別展「本にえがかれた子どもたち 町のこども・村のこども」』平成21年
- 5) 国立国会図書館国際子ども図書館編『国立国会図書館国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」』平成26年

写真提供

写真1～18 古河歴史博物館